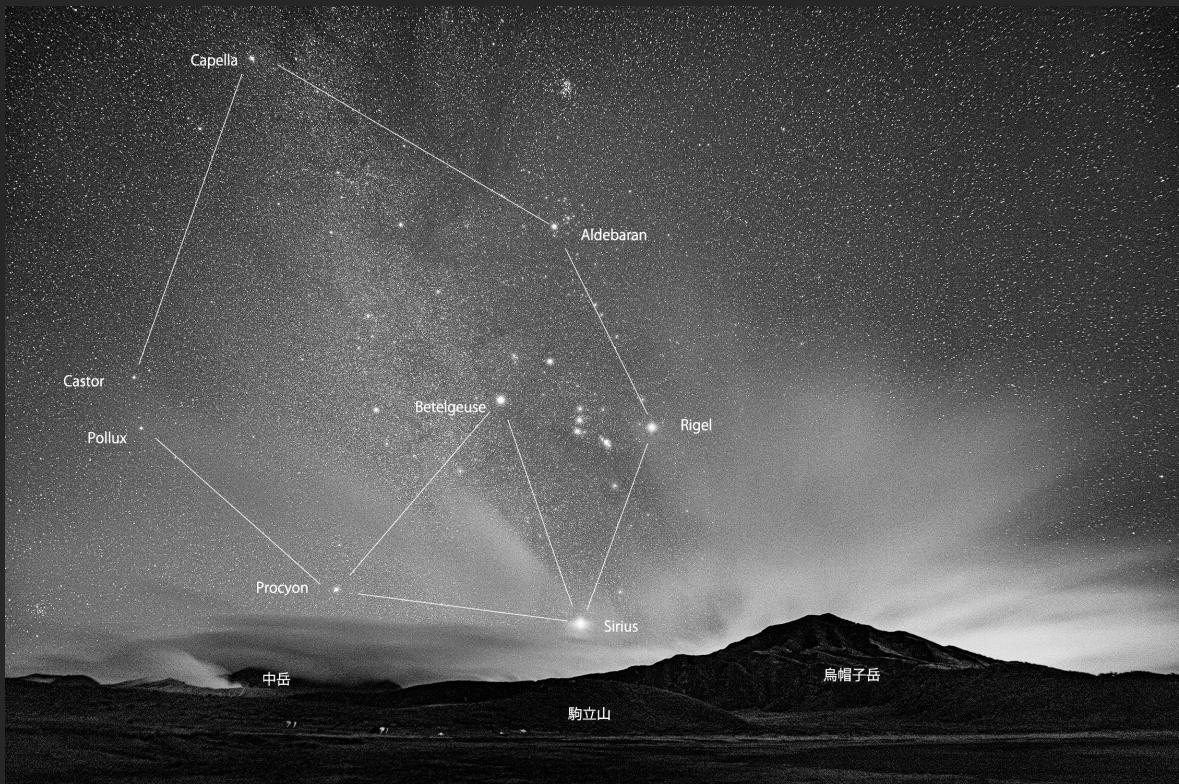


天文教育

11
2021

*Publications of the Japanese Society for Education and Popularization of Astronomy
(PJSEPA)*



＜投稿＞第11回高校生天文活動発表会報告～オンラインで行った天文
高校生集まれ！～

＜報告＞天文教育フォーラム報告～研究者とのコラボレーションによ
る事業企画～

＜その他＞2020年度事業報告及び収支決算 資料 ほか

一般社団法人 日本天文教育普及研究会

本誌原稿募集のお知らせ

編集部では下記の原稿を募集しております。会員の皆様からの活発なご投稿をお待ちしております。

なお原稿の投稿は、編集部から依頼した場合を除き、原則として当会会員の方に限らせていただきます（共同執筆者に会員を含む場合はこの限りではありませんが、投稿は会員の方からお願ひいたします）。

1. **原著論文**：天文教育・普及について、オリジナル性があり考察が優れ、学術論文として主な内容が印刷発表されていないもの。表題、アブストラクト（要旨）には英文も付けてください（英文は審査通過後に追加也可）。
 2. **解説記事**：天文学や天文教育・普及に関する解説・紹介記事や、さまざまな天文教育や社会教育などの実践記事。分量は刷り上がりで6~10ページ程度。
 3. **各種の報告など**：支部会やワーキンググループの活動報告、各種のイベントの報告など。分量は刷り上がりで2~4ページ程度。
 4. **書評**：天文学や天文教育・普及に関する書籍の紹介。分量は刷り上がりで1~2ページ程度。
 5. **会員の声**：会員の皆様からのご意見・ご感想など。分量は刷り上がりで1ページ程度。
 6. **表紙の写真**：タイトルと400字以内の「表紙の言葉」とともにご投稿ください（写真のみでも構いません）。
 7. **情報コーナー（各種会合・イベントの告知など）**：支部会やワーキンググループの会合、また天文学に関する各種の会合・イベントなどの情報。分量は任意ですが、スペースの関係で適宜省略させていただく場合があります。会合・イベントの開催日と会誌の発行日（奇数月下旬）にご留意ください。
- ・**締め切り**：1は随時受け付け、2~7は偶数月（発行の前月）15日です。投稿先は post@tenkyo.net です。
- ・本誌に掲載された記事（上記1~6および7の一部）は、当会Webサイトにてpdfファイルの形で一般に公開いたします。インターネットでの公開に差し障りのある場合は、ご投稿の際にその旨ご連絡ください。
- ・広告掲載を希望される方は事務局（jimu@tenkyo.net）までお申込みください。掲載料はB5判1ページ ¥20,000-、半ページ ¥12,000-、1/4ページ ¥7,000-、チラシの折り込み ¥20,000-です。

【編集委員会からのお願い】

『天文教育』の編集は、すべて会員からなる編集委員によって行なわれています。ご投稿の際には以下の点についてご協力いただけますよう宜しくお願ひいたします。

- ・原稿の投稿は、原則として Microsoft Word ファイルでお願いします。
- ・執筆用のテンプレートが当会 Web サイト (<https://tenkyo.net/>) からダウンロードできます。できるだけこのテンプレートをご利用くださいようお願ひします。執筆上の留意点なども記しています。
- ・充分に推敲を重ねた完全原稿でご提出ください。分量や内容によっては手直しいただく場合もあります。
- ・提出データは必ず各自でバックアップしておいてください。
- ・Word 以外に一太郎ファイルやテキストファイルでも受け付けております。
- ・原稿のご投稿やご質問は電子メールにて、下記のアドレスへお願ひいたします。

投稿先・質問先 メールアドレス：post@tenkyo.net

表紙の言葉

「火口」から見上げる阿蘇の星空

2021年10月10日01h22m、Canon EOS R5、AF-S NIKKOR 14-24mm F2.8G ED(14mm, F=2.8) ISO8000、30秒露光、撮影地：草千里ヶ浜（熊本県） 撮影・解説：大西浩次

熊本駅から阿蘇山へ向かった。街中を抜けると次第に高度を上げてゆく。いつの間にか山間地に入ったと思うと、ここは阿蘇カルデラの外輪山であった。そのはるか遠くにいくつもの山並みが見え、周囲は広大な耕作地が広がっていた。さらに、活動中の中岳火口の方に向かってゆくと、広大な草原が広がっていた。草千里ヶ浜だ。さすがに、夜間の火山の登山は危険なので、今回は、草千里ヶ浜を中心とした広大な草原を中心に撮影し回った。ここには2つの浅い池があるはずだった。しかし、歩き回っても水辺が見つからない。どうも、秋は干上がっているようだ。それは残念なことであったが、この池の中から撮影できる楽しみがで

きた。というのも、この草千里ヶ浜は約3万年前に形成された「火口」であり、この池はこの「火口」内の2重「火口」の跡である。そう、「火口」から星空を見上げることが出来たのだ。いま、中岳第3火口から噴煙が昇っているのが分かる。

次第に、夏の大三角が西の空へと沈み、そして、オリオン座が昇ってくる。写真を撮りながら、草原の中に写る白い石が気になった。大きな石があるのだろうか。歩きながら撮影していると、目の前に突然大きな石が現れ、思わずライトを照らした。そこには、深夜にもかかわらず、草を食べている馬がいた。思わず、声が出そうになり思ひとどまつた。馬さんを脅かしてごめんなさい。こんな火口で星空を見て楽しんでいたら、馬も一緒に星空を見ていたなんて思いもしなかつた。いつの間にか、星空には冬のダイヤモンドが輝いていた。この撮影の4日後、阿蘇山が噴火した。さらに、その後も火碎流が発生するような噴火も起きた。本当に、地球は生きている星だったのだ。